

海の人材育成に関する国際シンポジウム

2016年7月19日～20日 | 日本・東京

セッション5：若年層向けの海洋教育プログラム

Photo credit: Nick Hall

黒潮実感センター

日本、高知県

1) 当プロジェクトの主眼点

里山里海に暮らす多様な主体が森川海のつながりを実感するため、間伐による人工林の維持管理と海の中の森（藻場やサンゴ群集）の維持管理をおこなう。あわせて海を生業とする漁業者とダイビング業者のコンフリクト解消と協働、子ども達の環境教育の推進を目的とする。

2) 参加組織その他のパートナー

海洋生物の宝庫高知県西南端の島柏島を「島が丸ごとミュージアム」ととらえ、1. 自然を実感する取り組み 2. 自然を活かした暮らしづくりのお手伝い 3. 自然と暮らしを守る取り組みなどの活動を通じて「持続可能な里海」のモデルを構築しようと活動している。1998年から活動を開始し、2002年NPO法人化。

すくも湾漁業協同組合、宿毛湾ダイビング大月地区部会、大月町立大月小学校、宿毛市立（沖の島小・中学校、大島小学校、橋上小学校）、三原村立小学校、大月町森林組合、宿毛市森林組合、三原村森林組合、大月町、高知県宿毛漁業指導所がその他のパートナーとして活動に参加している。

3) 能力開発において効果が証明された活動やツール

大月町柏島周辺海域には温帯や亜熱帯性魚類など、その数日本一の1,000種を超える魚類の生息が確認されており、近年全国各地から年間1.5万人ものダイバーが来るようになった。そんな中、海の利用をめぐる漁業者とダイビング業者との関係が悪化してきた。なかでも高級魚介類であるアオリイカの漁獲量の減少が、増え続けるダイバーの影響とする漁業者の声もあり、2000年頃両者の緊張がピークに達した。

私たちは両者の関係を修復するために、2001年、漁業者とダイバーに働きかけ、両者が協働してアオリイカを増やす取り組みを始めた。具体的には通常イカが産卵する藻場の代わりに山の木の枝葉を海底に設置しアオリイカの人工産卵床とした。その結果、開始初年度から全国トップクラスの産卵（産卵床1本あたり最大70,000～80,000個の卵）が確認され、海中写真や動画（成果の見える化）で漁業者やダイバーにその様子を報告した。この成功により両者の間に会話が生まれ、関係は少しずつ改善されていくことになった。

この方法は柴漬けと呼ばれる漁師の知恵にヒントを得、単に枝葉に石をくくりつけ海底に投入するこれまでの方法ではなく、ダイバーが潜って海底に鉄棒を打ち込み産卵床を固定する方法を考案した。これにより波や潮流による卵の離散が防がれ、かつ大量の産卵が可能となった。

これはダイバーによる潜水作業がなせる技で、漁業者にダイバーの存在意義を認めてもらう事につながった。

2003年からはこの活動をさらに広げ、地元小学生の環境学習の一環として取り組むことにした。そもそもアオリイカが減少した原因はダイバーの影響ではなく、イカが産卵する藻場が著しく減少する「磯焼け」が大きく影響していると考えたからだ。そこで子ども達には「森川海のつながり」学習を行っている。人工林と天然林の違いを学び、人工林における間伐等の手入れの必要性や、土壌動物の活動により作られる栄養塩が、森から海に流れ込むことを子ども達は学ぶ。また間伐の結果生じた枝葉を海中に沈め「海の中に森」をつくると、そこにアオリイカが産卵し、アオリイカが増えることを実感した。こうして地元の子も達が地元の山や海のことを学び、かつ自分たちで自分たちの海の資源を増やしているという誇りが身についてきた。同時にダイバーと協働で藻場再生の取り組みも行っている。これらの活動はテレビや新聞、雑誌等のあらゆるメディアで紹介され、全国各地にも広がっている。

人材育成という観点からは、地元の環境を自分たちでよくしていこうとする子ども達が増えてきたこと、また社会人では利害の対立する当事者同士であっても、対話と協働により関係を改善していくことが出来る人材が育ってきていると思われる。現在ではダイバーと漁業者の良好な関係が維持されている。

4) 特に、継続的に能力開発に取り組むことおよび／または同様のプロジェクトを他の地域で展開することに関連して経験した困難な課題

学校教育の中に位置づける際には、学校側の理解と協力が不可欠。総合的な学習の一環とする際には、学習の目的や実施方法の理解、関係各所との調整などをきちんと行う事が重要。そして活動を継続してやっていくためには、実施者や協力者（学校教師を含む）のマンネリ感を防ぐために、毎年もしくは数年ごとにマイナーチェンジをしていくことが、事業継続のための秘訣だと思う。

また別の場所や国で同じようなプログラムを再現するためには、その地その地ならではの課題や背景（人間関係なども）を把握し、それらに配慮しつつ、その状況に即した形に合わせたプログラムにすることが必要。

また活動を多くの方に知ってもらうためにメディアを使うことは有効だが、取材の際にはメディアの側に、活動の目的や趣旨、想いの部分をしっかりと伝え、良好な人間関係を築いておくことが、間違った報道をされたりせずすむ。メディアはえてしてヒーロー、ヒロインを作り、その人にスポットを当て番組を作ることが多いが、度が過ぎると関係者のねたみや嫉妬の対象となり、活動しにくくなることもある。関係している多くの人にスポットを当て紹介してもらう方が、後々活動がスムーズに進む。

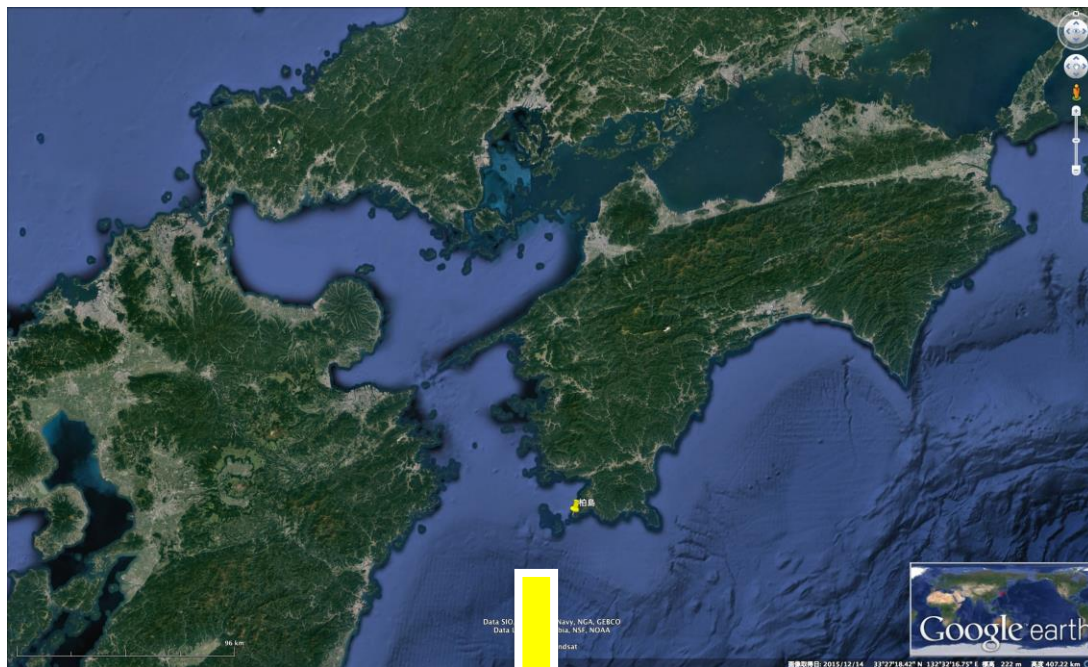
5) このプロジェクトの次の段階

アオリイカのオーナー制度を始めている。本プログラムは当初は柏島でのダイバーと漁業者との関係修復のための活動であったが、子ども達への環境教育に発展させ、さらに林業関係者や行政も巻き込んでの活動に発展した。

アオリイカのオーナー制度は、全国各地の市民から産卵床を購入してもらい、産卵床の設置にかかる費用の一部を賄うというもの。現地で増えたイカを地元漁業者から購入しオーナーに送る。その際にオーナーにはイカへのメッセージプレートを描いてもらい、それをマイ産卵床に取り付け、産卵の様子を撮影した写真もいっしょに送る。既に4年前から始めているが、全国から約80口もの応募があり、ダイバー以外にも柏島のファンが増えつつある。作業にあたる

ダイバー、漁業者、イカのオーナーにとって「三方よし」のWIN-WINの関係を築いていきたい。またこの活動が全国に広がることで「海を耕す」里海づくりの考えが広がることを期待している。

<http://www.orquesta.org/kuroshio/>



広域連携による海の中の森づくり